



孝子

七

七

ワ 3
6601
7 止



6601
7

草

篇目

- 一 空穗考
- 二 尻龜考
- 三 傍劍考
- 四 蝦夷織先考
- 五 甲冑名考
- 六 洗革證考
- 七 弓材考
- 八 辨慶七道具考
- 九 十張弓考

三十九年四月五日
三上齋

- 十 甲曹問答
- 十一 母衣問答
- 十二 武士学文問答

通計十二篇

冬草

平貞丈著

一 空穂考

夫をみるに海をくわす物ハ上古を考へりしに
 上古乃書きしに元はされば其始も詳あらず中
 古より出来し物あるを義を相伝る奥物度之
 年合我れしとき舎に義を相傳る奥物度之
 るに義相伝る國是柄はまにその不た中より其の語
 ちをり出して大食調の曲を豊原時秋に傳へ授
 是し事古今著書集に元より此比既にありし
 物あり孫余度此比にありしありしに元より東鑑に

こゝ右方じつじつ書くは道に花やをいふ事とあはし
とふ本式子にありしとて又武徳普話に天子十
八年二月小田系保のときより吉久系継威の程彦冠
乃中余の太閤付のち力二振をきし余の上儀は身不
の上子征夫一筋きしや孫子付は朱儀殿のちを打化
し舞を軍しれしとて天より昔異時とてこのこ
て出まきし一か上儀とてしよ付しれしとて或説はど
ひやしは蜻川系より始りしとてしよ付しは公振を
る子本山殿の比世子ありし蜻川系右門尉宮道のち
元より五代の孫子蜻川親長とてしよ付し人ありし水縁
より一慶長比世の人このの親長入道とて名を道

標ヒヤカとて早しき世に標を土儀とてしよ付しは道標とて
なりしは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
前よりしよ付しは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
はまをしよ付しは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
道標の始りしは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
なりしは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
はまをしよ付しは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
しよ付しは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて

二 尻巻

末よりしよ付しは蜻川系より始りしとてしよ付しは物よりありしとて
代巻花巻係は我經化長本平系物語本平記を訓化

本古今若竹集布衣祀三議一統之忠時出若竹
元これいさよりきき物ある事を知りて一統を以て今
世をこころ物と別ありきと分別を志する事也
平家物語の表門本もたると忠を有する男のありて一
方と持て云々古今若竹集も大層小層とてついで
何れ強きを棟梁あり器中小版たうしとておひく
まめさかうがひあごをきく形なり云々これ
いさよきとていさ名の見えたるの事あれば何の子細
をいさよきとてす

日本純衣神代巻物子千菊千五百菊五百の鞠二夫が終云
花の解情も鞠一夫を入る夫が終云云云とて菊と指し

了夫終云々又布衣純衣も忠を有する事也器中云々
菊と指し元ひきを指し終云云云昔は鞠と物を前子
いさよきといはくは元ひきとて純衣とて又三議一統
も持てゆくの忠立水干の形も鞠とて指しとて忠
一とてあごひの尾巻物を有する事也とていさよきとて
乃事をも忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とて
純衣をも忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とて
夫をも忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とて
あごひの忠代巻物も忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とて
忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とて
純衣も忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とていさよきをも忠とて

毒胡の御記に「まきぐ毒くろのこを記せる例あり」江家六

月二卷十九九月十一日一曰大将大臣の平胡の御自條毒云云世

俗俗御秘抄に曰「終國間有御幸時近衛治将位奉毒

胡は源之持事中器之與毒二人分持事長以見苦云云

雅亮装束抄二大将のまきぐの事一此不まきぐもやふらぐ記

まきぐあるまきぐ中のみめらぐ記あるの大まのまきぐ

まきぐまきぐ云云達幸故室抄云依る終國間有毒取

着座云北山行幸記にまきぐ後記つるまきぐありまきぐ

まきぐまきぐはまきぐまきぐの御將装束抄一條終國の桃花葉

葉まきぐまきぐ装束抄にまきぐの日記にまきぐ胡の御の事

まきぐまきぐ毒くろのこを記し又毒くろを記せるまきぐこれ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

まきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐまきぐ

勝柄を致す見しは古物、勝柄を畏本也。この文の也は
子王偏に加つて地の字に化し、この字は又本
地也。書くも本也。この字は皆傳字の誤。西
之條、裝束柄は、勝柄の條は、籍を大畏本柄の由あるを
いふ。この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
一は、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
あるもの、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
て、又、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
柄は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
る。この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
儀、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの

いふ、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
を、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
ふ、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
い、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの

四 蝦夷録先史

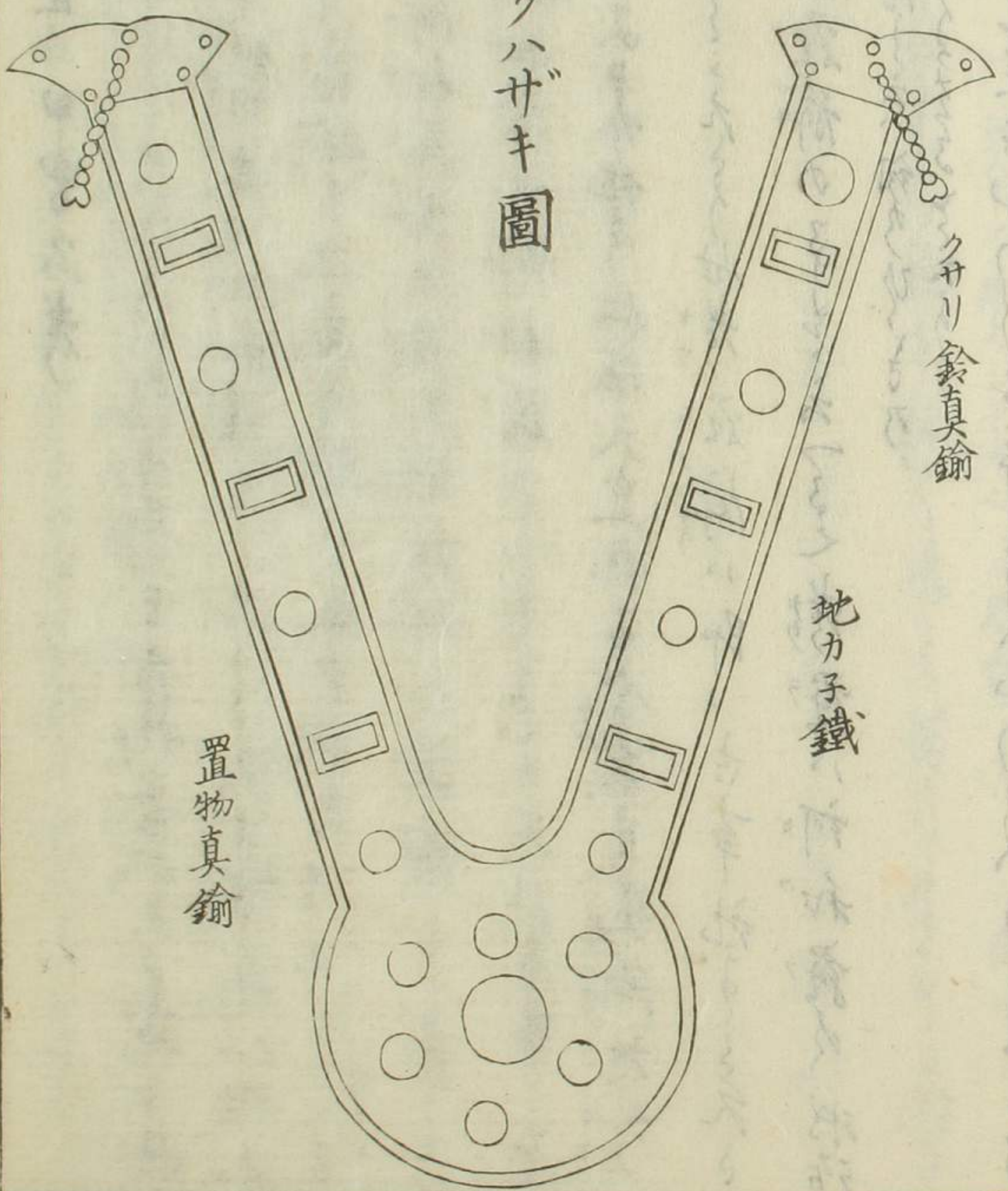
蝦夷の國の人、此寶物も、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
を、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
物、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
を、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
を、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
を、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの
を、この字は、勝柄の一本は、本柄である。よりの

事々云々を言流あつて下東學をえりて我孫自集所齊
る録より自害をこれとて言首をさうして酒子後
て録愈も送下りて見えたり頼朝并子梶原景時等が我
孫を憎むり甘くして下バ贗首を中々更に
中がさる子之由まに我孫集所を自害をさうして
角にださればいふはさるる我孫のさるる子あり
さるる子を知りて下角より近世馬場信忠といふ我孫
孫勤功化を云書成造りて我孫衣川の敵を自害志
するま事して酒子蝦夷に居りぬれりてを記して
す世人等も事りて酒子に言流を我孫とされ
るる若くは酒子孫を平化 此書近世り人の化されども古
き日記を集く綴りて物

厚花ありて中々あれり
又ありて言首あり 仁倉永十八年小山悪口内隆政とい
ふ者自集より礼を起し依り孫余り執りて孫氏意討
て下りて酒子孫を小山城を圍く攻む隆政勇を奮
ひ圍を破り律種を去り酒子孫を酒子の國を
武勇をさるる酒子孫が蝦夷人等怖まじりて酒子
孫國の酋長は婿ありて天命を以て孫に酒子
元びも酒子崇教を祠を立りて酒子孫を相今も酒子名
だるる酒子孫を酒子孫といふ酒子孫を酒子孫といふ
酒子孫を酒子孫といふ小山隆政が曹の酒子孫といふ酒子
か酒子孫を酒子孫といふ酒子孫を酒子孫といふ酒子孫
酒子孫を酒子孫といふ酒子孫を酒子孫といふ酒子孫を
酒子孫を酒子孫といふ酒子孫を酒子孫といふ酒子孫を

何れもすず家しと古き 經ハ梳の 敷ものぐも宝物
 一々物のおくも一 蝦夷はり元一々る 書よこまて
 況や陰政がくもくを 林物一々る 出業よこまて
 有つきりありう 経義経勲功化り 安説と傳ははて
 松前の人まぐも 経義経蝦夷伝へ 経をいれ 書をいへか
 の 蝦夷のくもくもくもく 経の 祠とまて 又近蝦
 夷子 舟^{ゴレ}慶^{ケイ}崎^キとりの 所ありと 経は名り 蝦夷の祠と
 あつて右の 経の 經とまて 松前あり 名付一々る
 一々

蝦夷クハガキ圖



クハリ 鍔真鍮

地方子鐵

置物真鍮

加和の自しきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

吾が國のしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

す福上カウのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

中ナカのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

陽キヤウ之氣キ動ク从レ木キ氣キ字フ甲カ之ニ象ニ之ニ元ニ之ニ注ニ

乃ナ意ニ甲カのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

末マのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

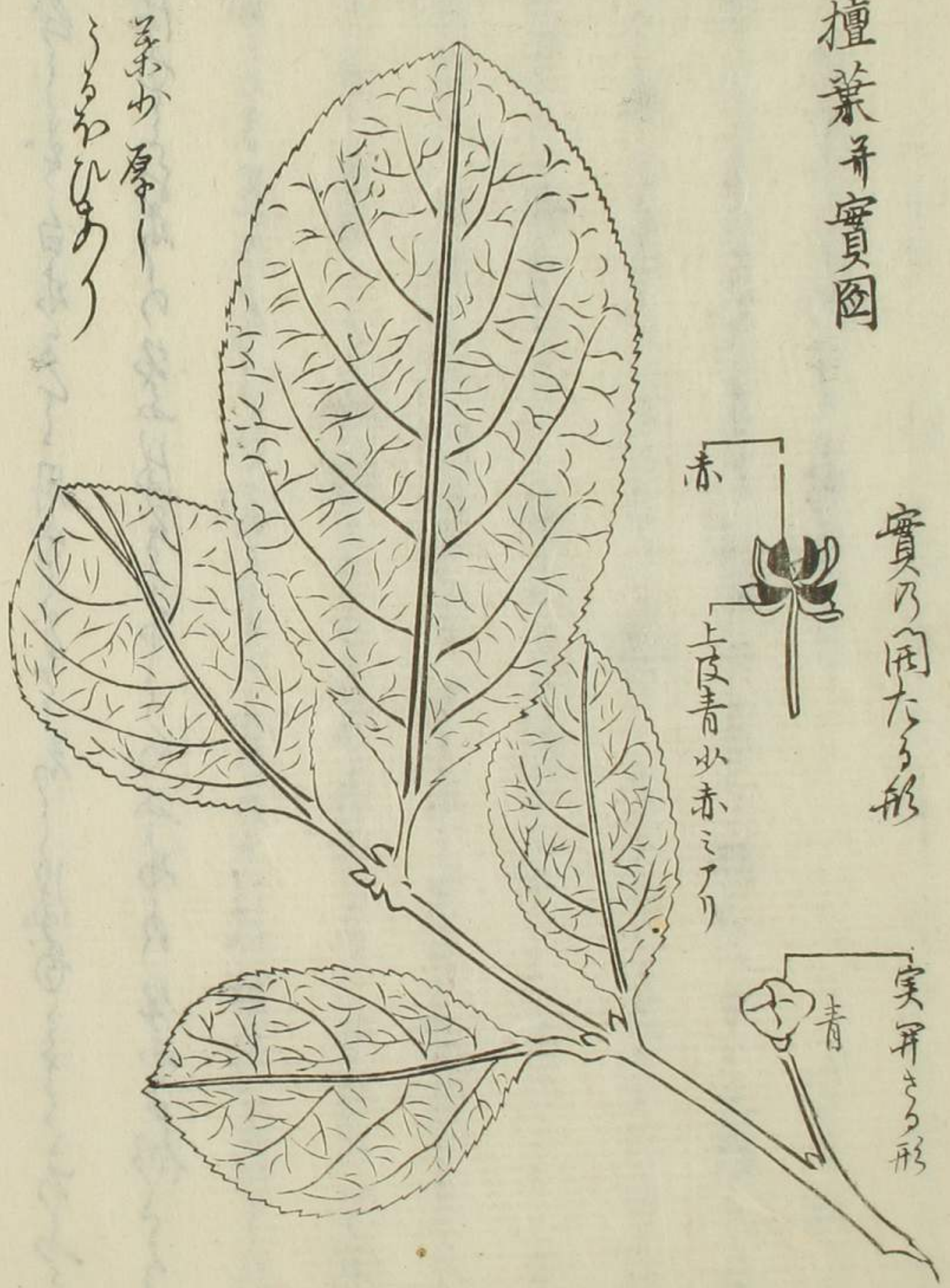
之シのしきまのしと和を和のしきまのしと和の和あり

まの丸木さうの持いしものさへは、
さの勢ありき、甲冑の透きと、
あつては、櫛を、本字類の、
人まのき、成ね、向ひ、
し、

檀弓 古事紀万葉集古今集之代
式も、え、し、
和み、
か、
し、
判、

け、
あ、
は、
知、
く、
ふ、
は、
か、
や、
の、

檀葉并實圖



梓弓 古事記日本紀三代實錄延喜式古今集等

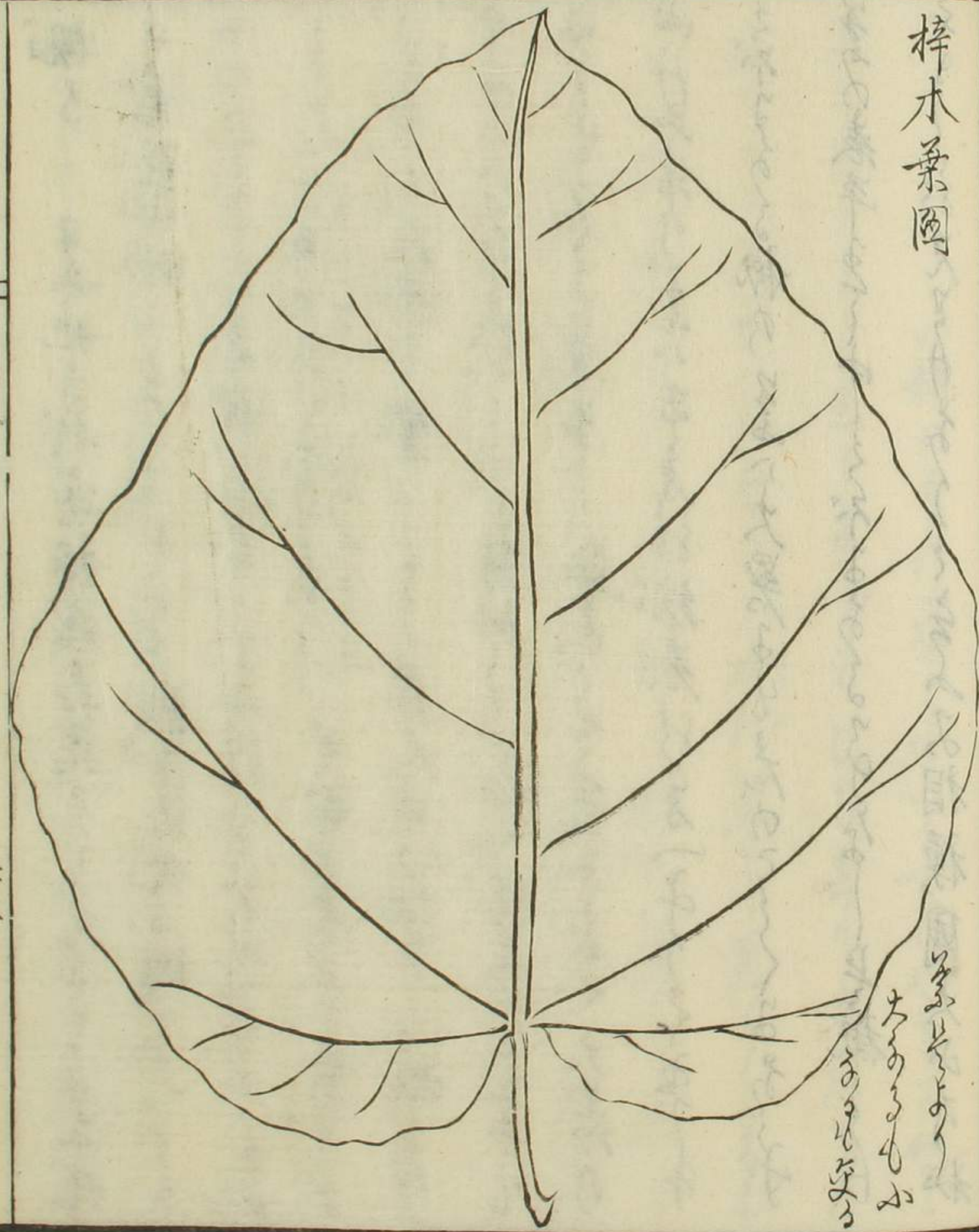
之氣しと梓弓木を割しとる弓之梓和名抄

和名阿豆佐アヅサとあり一名かきとひきまといふと云梓木を

考ふとてとる名とていふと云ふ又角豆サゲのこしとていふとる

実とていふとる名とていふと云ふとるも桐と似

くキノ木堅細しと云ハシ櫃と似とて色ハ白

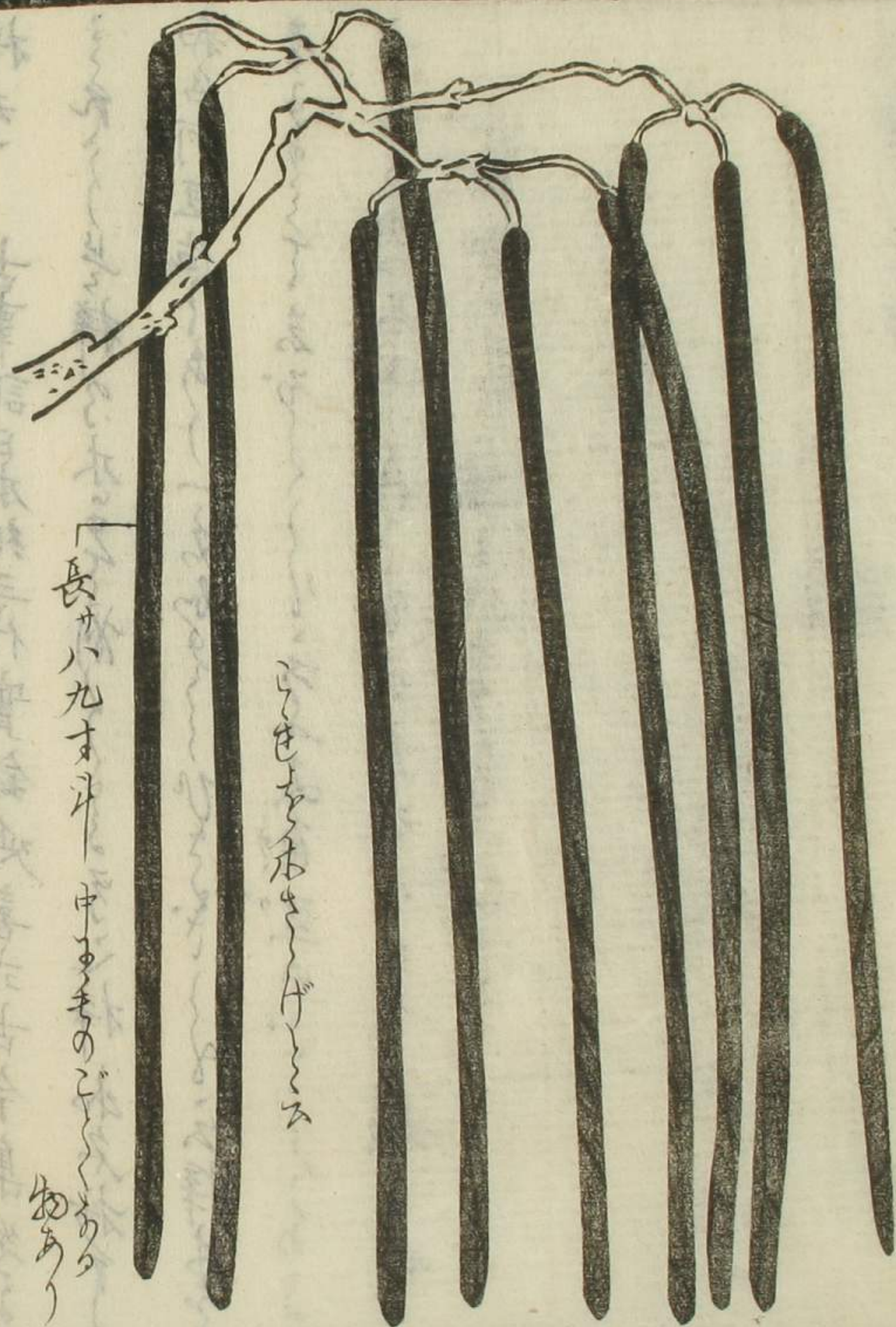


梓木葉圖

葉の形は
大なるものか
小なるものか

冬

三五



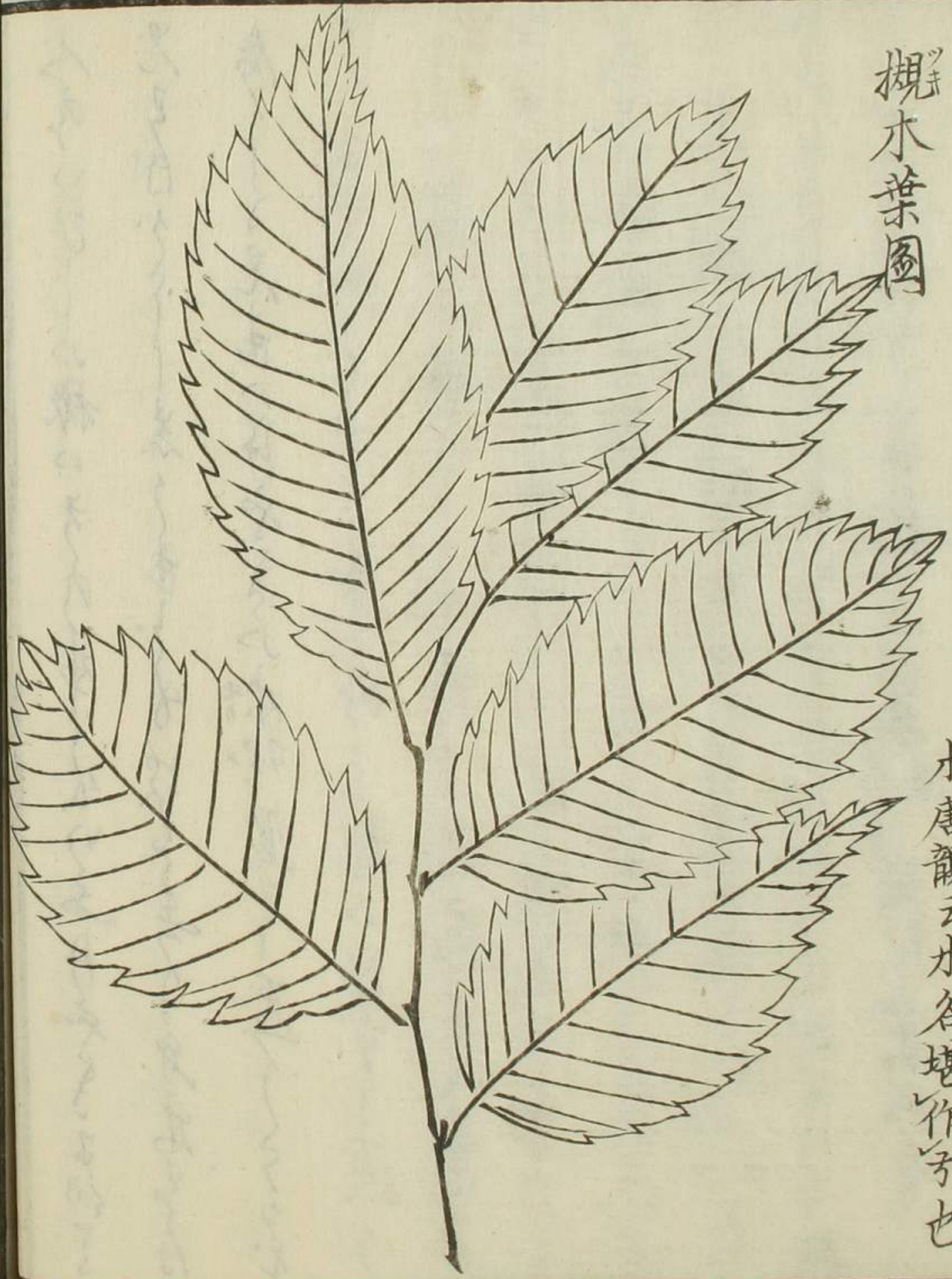
梓木の實の形

長さ九寸許
中まきのこ

物あり

梓木 日本 三升 實 長 丈 五 寸 許 今 集 録

ろくご
槻木葉圖

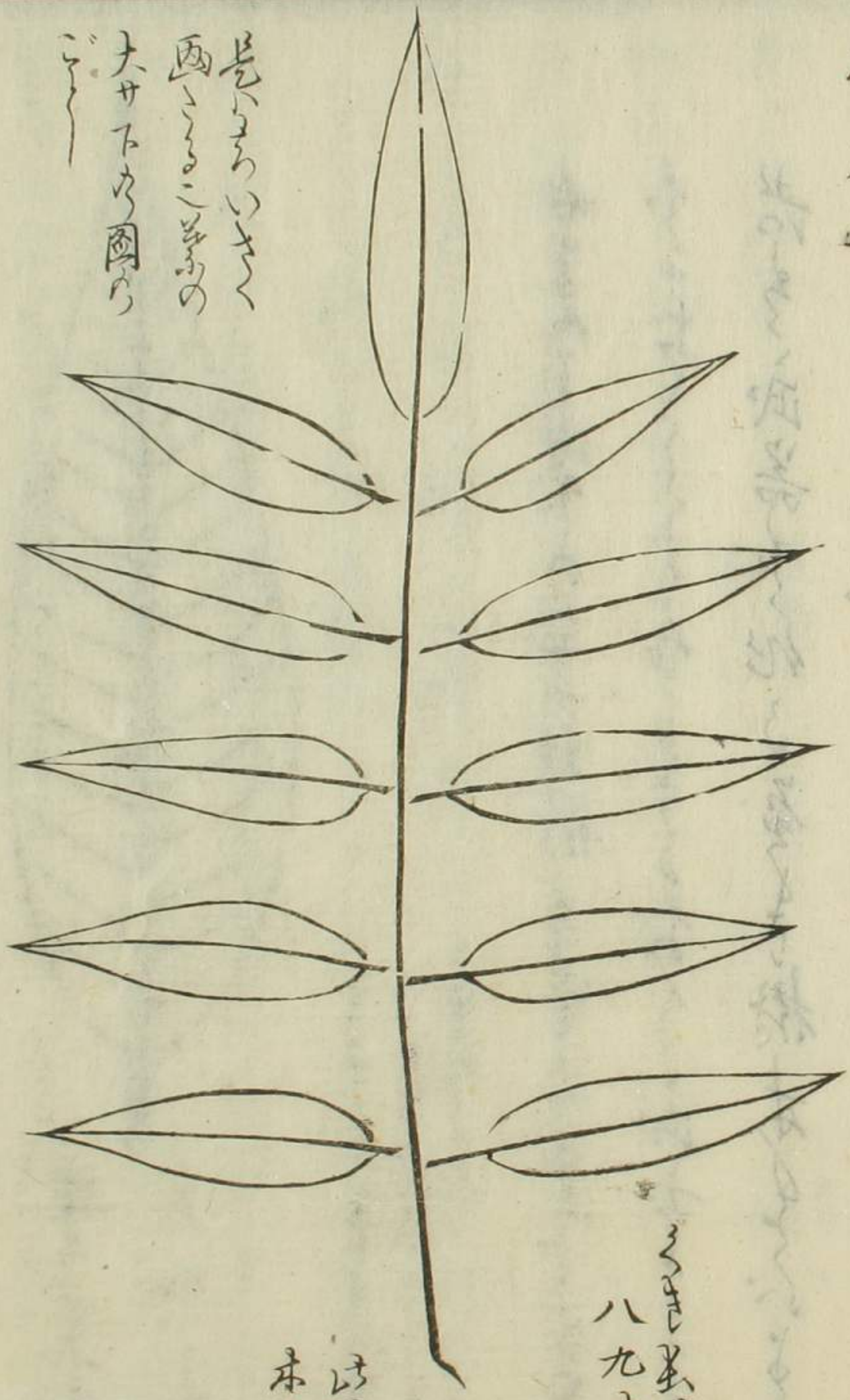


槻和名秋云和名豆木乃
水唐韻云水名堪作字也

柘弓 三代実録延喜式に云くは柘木を以て
削りて弓を造るなり和名柘弓和名豆美とあり柘
字俗に片がけともいひ程あり 柘は俗に野桑と云ふ葉
片は小葉揚木あり 柘の葉の形を以てしるはれり
も一実も葉の形を以てしるはれり柘の葉は
一葉の形を以てしるはれり

へはハ草あり其心ハ苦あり
 割る之命世の多能なる
 了所を用る之本の如口
 苦あり所ハ行ります
 割るより一本のふも
 袍黄檀保しつゝ
 産及寮式より
 心ノ苦
 あり前
 天子所
 用るあり
 産及寮式より

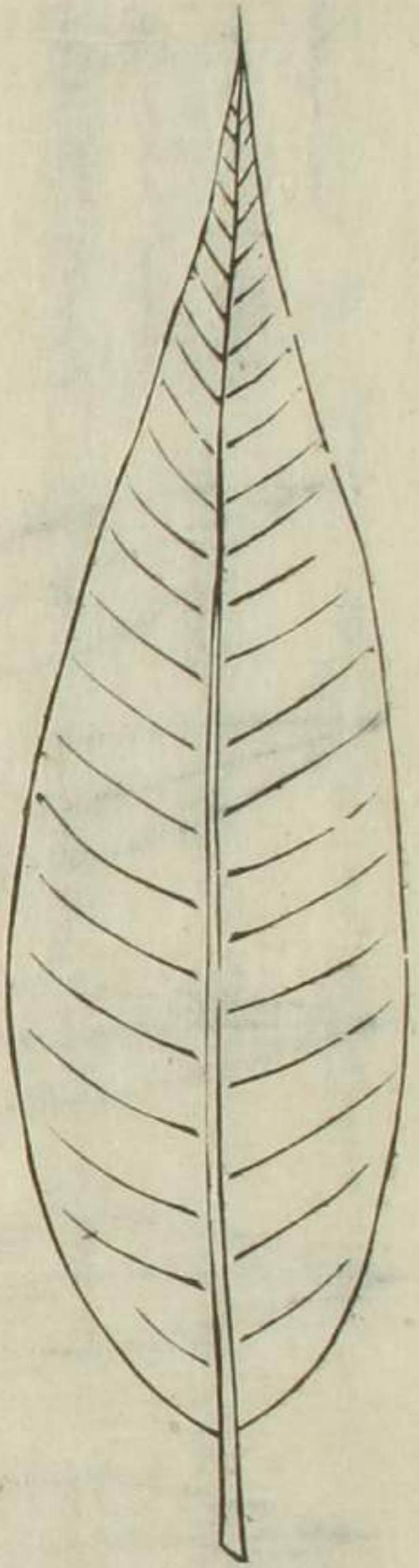
楹木葉圖



長きありいさく
 西くありこぎの
 大サ下り園ら

八九寸
 葉サ

本所
 本子付



権り多ふ大サ
これ石也

うららの糸をうららふ
うららきあふらうらら
ゆあり

右まの下の糸の形も生糸の糸とよく
たがふきうららうららうらら
若くは武器を作る糸も樹木をうらら
え知らうららうららうららうらら
糸もきうららうらら

批り 此の式は古来年中行事神宮の事根原

糸のうららうららうららうららうらら

難うららうららうらら 追難のおとろしうらら 方相氏 うらら

能面 うらら うらら うらら 衣 うらら 裳 うらら 束 うらら

若くは糸も糸のうららうららうらら

糸のうららうららうららうららうらら

糸のうららうららうららうららうらら

糸のうららうららうららうららうらら

糸のうららうららうららうららうらら

糸のうららうららうららうららうらら

て働くものありきれば左子抱尾の板をうへへは抱
尾板は強直すし右屈伸のき物ありき右ま下の端
よりひくくの袖小手の代袋を引くくして始りて
ゆへ抱尾板を不用し右柔転りて自由ありせん
かんの板を用ふるあり

又問云右のうへへせんかんの板屈伸自由を利
用あり物ありて左よりせんかんの板を用ふる
事ありて左子抱尾板を用ふるは如何 答云右
の相引のき下右より左よりし右の臂のよりより
働く所あり右屈伸自由ありせんかんの板を
用ふるありて左の相引のき下右より手先ありて

所ありて左よりせんかんの板を用ふるは柔転り
てひくくめき物ありて左よりし右の板を用ふる
事ありて右の強直ありて抱尾板の
用ふるは利あり

又問云右より左よりせんかんの板を用ふるは利あり
は板を相引も右の相引もせんかんの板を用
かづきありて左よりし右よりし右の強直ありて
答云強り抱尾板ハ右よりし右よりし右の強直あり
ありて右よりし右の強直ありて抱尾
板を不用しせんかんの板を用ふるありて右より
短き物ありて右の強直ありてせんかんの板を用ふる

書ハ後半より相成り同形より左方より右方まで
と云ふ事也

又同云せんふんの振の形を古書より見んくく
尾振小出羽のくくふふ古書より見んくく
云々古書より見んふんの振の形を古書より見んくく
くく云々一具の振の形を古書より見んくく
ハ本形一葉の形を古書より見んくく
せんふんの二葉の形を古書より見んくく
せんふんの振の形を古書より見んくく
遠くより見んくく
尾振の形を古書より見んくく

くく小出羽の形を古書より見んくく
くく一葉の形を古書より見んくく
くく一葉の形を古書より見んくく

同云六形の水呑の形を古書より見んくく
中分程の形を古書より見んくく
いりふもや 古書より見んくく
乃神の形の金物長くく
くく文傍の形の金物長くく
くく一葉の形を古書より見んくく
あがの形を古書より見んくく
んがの形を古書より見んくく

あつたまゝにありしまゝにせんが存ありぬ程の事社に
入あまはばあふらむ社に水呑たり然るをありけりま
のまゝに社にありしを社にありしはあまゝに無きありあ
まゝにありしを社に送板たり環を付するありありあ
の板子のまゝにありしを社に水呑たり然るを存ありし
めありぬ社にありしを社に必用はありありさればあ
あまゝに存ありしを社に何を表も彼を系にありあり
いふにありしを社に承り及むにありしを社にあり
を社にありしを社に格と社に非況をありしを社にあり
やまゝにあり

同云古代の程に順ありしは其程にありしなり 言ふ古制

乃程も今程相り同くたけあれども古制はゆるぎな
系は有所相ありしなり 或るありしを社にありしを社に相
程もありしを社にありしを社に今制もありしを社にありし
相ありしを社にゆるぎなくありしを社にありしを社に
又同云古制もゆるぎなくありしを社にありしを社に
上げし存ありし何の事ぞや 言ふ古制もゆるぎなく
ありしを社にありしを社にありしを社にありしを社に
相ありしを社にありしを社にありしを社にありしを社に
ゆるぎなくありしを社にありしを社にありしを社にありし
の所危きありしを社に今制もゆるぎなくありしを社にありし
ゆるぎなくありしを社にありしを社にありしを社にありし

後ハ軍子弓矢を以て攻め守るるヲ^{ツルギ} 練子ありて
地をさしり用る由ハ母衣子と夫を信するもの
〜^{ツルギ} 由ハ何れも物と知れぬ〜^{ツルギ}
〜^{ツルギ} 折るり邪説をいひや〜^{ツルギ}
後代保侶とて夫を信する絶くニ吾用は物あり
〜^{ツルギ} 古より〜^{ツルギ} 夫〜^{ツルギ} 物ありバ捨ておはす
〜^{ツルギ} 絶く〜^{ツルギ} 有る由ハ物あり〜^{ツルギ}
〜^{ツルギ} 母衣の制古今替りあり母衣の半ハ先年
ガ著〜^{ツルギ} 保呂衣推考〜^{ツルギ} 書子委細に記
〜^{ツルギ} 是た〜^{ツルギ} 累〜^{ツルギ} 大徳〜^{ツルギ} あり
答るなり

又問云為り國ハ母衣を用るものありヤ 答云母
衣ハ然國の〜^{ツルギ} 用〜^{ツルギ} 衣ハ用ひ〜^{ツルギ} 物あり或ハ母
衣ハ漢より主良より始〜^{ツルギ} いハ武ハ強良〜^{ツルギ} 始
〜^{ツルギ} 武ハ禁噴あり始〜^{ツルギ} 説あり〜^{ツルギ}
〜^{ツルギ} 衣ハ書〜^{ツルギ} 衣ハ説あり〜^{ツルギ} 衣ハ
或ハ衣の形〜^{ツルギ} 衣ハ我國の母衣子引あり
〜^{ツルギ} 説あり〜^{ツルギ} 衣ハ強附衣の説あり〜^{ツルギ}
〜^{ツルギ} 衣ハ〜^{ツルギ} 衣ハ母衣あり〜^{ツルギ}
物〜^{ツルギ}
又問云藤子膳〜^{ツルギ} 衣ハ宋時代衣大儒あり
宋坡居士〜^{ツルギ} 衣ハ人の著〜^{ツルギ} 衣ハ
殘儀兵の〜^{ツルギ}

兵書板本よりありて其兵力的の中は傑傑之儀
云篇ありて其篇の中は鏡ホロの事見ゆて其
ハ唐の母衣を以て云ふなり何れ如何 答云儀
兵的の云書予りしより見ゆて其書は太公
望の婦人化して張良が夢を以て六韜を授け
し事と書くは孫子大公望の觀世音也黄石公の
摩利支天の事と云ふは皆門外を以て其書を引
たり所りありて其文章甚拙し日本は其味浅
学乃出れば其なり也其色が作して其
人の信ぜざるを以て孫子膳が其
借りて其書を以て文章の事ハ皆其知りて

事ハ眼より見る事ありて其文章は其由学
其乃眼より見る事ありて其文章は其由学
由人かゝる仍作り書き見えし事ハ其由学
たり

十二 武士学文回答

問云武士の唯武藝を以て其学なるは学文あり
まざる事不及之唐の事ハ其文章は其由学
を以て其文章は其由学を以て其文章は其由学
乃害なる事ありて其文章は其由学を以て其文章は其由学
学文とて其文章は其由学を以て其文章は其由学
す又其文章は其由学を以て其文章は其由学

此一冊孫のが存ありしに如くもふ書ふ
く老る身は手書ありしをその
所々書終りし如ればらの書成るべし
と云々

安永七年戊戌十一月七日 伊勢平藏貞文書

書肆

京都三條通升屋町
出雲寺文次郎
同 寺町通松原下ル
勝村 治右衛門
大坂心齋橋通北久太郎町
河内屋喜兵衛
同 安堂寺町
秋田屋太右衛門
江戸日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛
同 本町通横山町壹丁目
出雲寺萬次郎
同 芝神明前
岡田屋嘉七

